南俊允

みなみ・としみつ｜
1981 年、石川県生まれ。
東京理科大学理工学部卒業、同大学院（小嶋一浩研究室）修了。
伊東豊雄建築設計事務所を経て、'17 年より独立。
慶應義塾大学、横浜国立大学、東京理科大学で非常勤講師を勤める。
代表作に『みんなの森 ぎふメディアコスモス』など。

藤井 + 高橋 + 山田 × 「11」

畝森泰行

うねもり・ひろゆき｜
1979 年、岡山県生まれ。
横浜国立大学卒業、同大学院修了。
西沢大良建築設計事務所を経て、'09 年より独立。
横浜国立大学、日本女子大学、東京理科大学で非常勤講師を勤める。
代表作に『須賀川市民交流センター tette』など。

「総評」

――お二人の中で気になった作品などをまずはお伺いしたいと思います。（高橋）

畝森　今年は全体的に良かったと思います。僕は留学生を巻き込んで設計した金子さん(p.92-)の提案が特に印象に残りました。途中で疲れたからやめるという、ああいった決め方は面白い。ある瞬間から自分の手を離れて自動的に進んでいく。どこまでが自分の範囲か分からないけど、全体としてなんとなく自分の設計として出来ていくというつくり方はユニークだと思いました。かつ彼女は農学部出身で、生態的なものに興味があり、その延長で建築をつくっているのも良かったです。

南　あんまり票は入っていなかったけど、南（苑佳）さん(p.114-)がやろうとしていたことはなんとなく分かる気がしていました。うまく着地できていないとは思うんだけど、卒業設計としてはすごく良かったなと思っていて。「こういうことが問題だから解決します」というよりは、「自分がこういうものを求めている」みたいなものを無理やりかたちにするということをやろうとしているから、結局失敗してもそういうところに向かっている感じはあって、それはすごく良いなと。その場所とか風景が、記憶に残るように何かを加えるというか。僕が勝手に思っていたのは、例えば富士山みたいなものがあることで、静岡から見た富士山とか北斎の絵とかもそうだけど、時代や国や文化が違う人がいるときにそれらを問わずその地域を各々が理解する。そういうものが街とか都市にどういう豊かさを与えるかというのを考えているのかなと思っている。南さんは建築をつくっちゃったんだけど、必ずしも建築じゃなくてもいいかなという気はしていて。機能がないようなかたちを言っていたんだけど本当は、例えば東京タワーが電波塔としてあるんだけど、その電波塔の機能を超えてその場所のものになるみたいな、もうちょっとそういう風にやっていくと面白かったのかな。たぶんつくりたくないというよりは、あるものの意味が無くなったり、意味が変わった時にもうちょっと違う雰囲気が出てくるようなことをやるとよかったかもしれない。村のかたちをつくるという時も、村には道路があって家があって、集落とか経済的にも合理的に作られているんだけど、そういうこととは別に風景としてできている。集落とかもそうじゃない。あれは別に、こんな豊かなかたちをつくりたいというよりは、そこでの生活が営まれた結果できている、という豊かさがある。そういう風にもうちょっと入り込めたら面白いのにな、と思って見ていました。

瀬川さん(p.10-)の案は、何かを付け加えたりすることで、今までと全然違うロードサイドの商業施設になるというのはすごく面白いなと思ったんだけど、結局ヴォリューム模型と周りに付属するっていう形で、本当はそれが付属することで、内部の商業的なプランが変わってしまうみたいな、そういうものが見たいなと思った。そういう意味で1個良いなと思ったのは、スロープがバーンとぶつかってるところが、2階のレベルが大きく空いていて、今まで箱で閉じていたものが全部半屋外に出ていた。そういう風に都市的な外部を付け加えることで、外の目線が結構大きかったんだけど、それによって商業的にできているプランとか中がもっと変わるといいなと思って見ていました。でも視点はなるほどなぁ、と思って見ていました。

畝森　5つのルールによってすごく良くなった、ということをもうちょっと可視化して欲しかった。どこでもこのルールを転用できる、その5つを使うと建築や街が大きく魅力的になる、ということを示した方がいいよね。5つの根拠というか、有意義さをきちんと提示できれば良かったと思います。ルールを明快にしたことは素晴らしいと思う一方で、例えば近くにある緑道などに伝播するとか、一個一個の点が線上に繋がっていき地域自体に波及していくことも考えられた。特に防災や都市計画を考える場合は、面的または線的な広がりが大事なので、その提案があるともっと良いと思いました。

南　これも先ほどの南さんの話じゃないけど、ロードサイドのこういう施設を何とかしようっていうためにやるんじゃなくて、災害拠点の場所として考えていった結果、それが商業施設の新しいあり方にもなってるみたいな、もっとどんどん意味がいろんなところに伝播していく豊かさがあるのは面白いんだろうな、と思って聞いていました。

畝森　南さんは誰を一番評価しましたか。

南　僕は瀬川さんが良いなと思いました。今年はそれぞれ個人があっていいなと思いました。今年は郊外があったり、小さなランドスケープがあったり、住宅つくっている鈴木くんがいたりとか、なんか興味の方向がばらけているのはすごい面白かったです。

畝森　それは僕も感じました。自分の個性が卒業設計に現れているのは良いですね。それがプログラムのバリエーションなのか、敷地のバリエーションなのかではなく、興味のバリエーションが現れていることが印象的でした。だから面白かったのかも。

「アウトプットの方法」

南　でもその割に、やっているものが結局同じものとしてそこに出されているっていうのはちょっと気になっていて、普通模型をつくって図面を描くことになるんだけど、例えばさっきの金子さんのもそうだし、藤井さん(p.120-)のもそうなんだけど、時間によって変わっていくようなものだったりするじゃないですか。それって図面は図面であって、ダイアグラムで変わりますって言ったりするじゃない。でもそういうものだったら図面だけがひたすら変わっていくような表現をするとか、模型も1個のものが変わっていく様子が分かるとか、やることに対する表現の仕方というか、こんなに個性があって違うからそういうやり方があってもいいのかなという気はしました。よくあるのは、さっきの瀬川さんのもそうだけど、全体計画をやろうとすると5箇所ぐらい部分を取って、あと全体こうなってますみたいな表現ってあるじゃない。卒制って時間もないし、けど大きいのやりたいし、みたいな時に、なんか似通ったことになっているのはちょっと気にはなっていました。

畝森　僕が学生の時に卒業設計を手伝った先輩が、「食べ物は重要だ、野菜は生のものをもぎって食べるものだ」という信念を持っていて、都市農園をテーマにしたのですが、それを示すためには野菜をもぎるところから食べるところまでの一連を示したい。となると模型や図面では表現できないので、その人は全部漫画でプレゼンしたんです。別にそれは大して評価を得られなかったけど(笑)、西沢さんが唯一評価されていたのは印象的でした。

南　ただその場合もの自体に強度がないと、良い反面表現の方に注目されちゃって、案の本質に話がいかないっていうのはちょっとありますね。

畝森　だけどアウトプットの方法を目的を持ってきちんと考えるのは、大事なことだと思います。

例えばこれからの設計は、そもそもクライアントから出される条件などは怪しいわけです。予算や敷地ですら怪しい(笑)。やはりこれからは与えられるものが全てではないことを意識した方がいい。そこから自分の設計は始まるというか、条件から変えていく気持ちでいないと生きていけないと思います。常に疑問視し、提案できるように考えて、自分が関わるスタート地点をもっと前に持つのはすごく大事です。それによって条件が変わればもちろんアウトプットも変わってくる。

南　この前藤原スタジオの打ち上げをして、藤原さんもまさにそういうことを話していて、藤原さんが隈事務所からずっと今までやっていることで、どこにプライオリティがあるかっていうと、初期設定を変える。コンペの時も、デザインどうこうじゃなくて前提条件をまず見直して作るっていう所に一番藤原さんの面白みがあるらしいんですね。それは僕もとても共感します。藤原さんがY-GSAで産業について言っているんだけど、話を掘り下げて聞いていくと、産業についてやりたいというよりは産業をきっかけに、そもそもそこの本質は何か、みたいなものを再設定したいっていうのがあるのを感じました。個人的には、それ自体を課題にしたものを見てみたいと思いました。つまり課題を作るという形にすればいいのになって思った。みんなも課題を解くじゃなくて、卒業設計って課題を作るというところから課題が始まるみたいなものだから、そこの設定をもうちょっと幅広くできると面白いんだろうなという気はしました。そういうことやっている建築家が近くにいるぐらいだから、それ自体そういうもの自体が結構現代的でみんなにとってもリアルな気がします。

「名前と矛盾」

——最近興味があることはありますか。(藤井)

南　最近やっていることだから設計のことになっちゃうけど、横国の西門のコンペに出したんですよ。西門とバス停をつくりなさいというコンペで、ほぼほぼ機能がない。特に門の方は機能がないっていうのがあって、機能がないものをつくる時にどうやって作るかっていうことを考えていて、ふにゃふにゃした門を作ったんですけど、東京タワーとかの話と同じように、名前が付けられるものってどういうものなんだろうって思って、例えばふにゃふにゃとかなんでもいいんだけど、なみなみとかっていう名前が付けられる、しかもそれは一般の人に名前が付けられるような状態ってどういうものかなと思って考えていました。少し違うかもしれませんが、妹島さんがおっしゃる「美しいことは機能である」ということはともてよくわかりますし、それと似たような豊かさを、名前を付けられるということにも感じます。国境や時間とかを超えて、共通する価値観みたいなものを勝ち取れるんじゃないかという気がしていて、それはバス停だから考えたんですけど、本当は伊東事務所時に担当していた「ぎふメディアコスモス」の時にそれを考えていました。上からクラゲみたいなものが吊られていて、あれは見たことのない形なんだけど、いろんな人がいろんな名前で呼ぶんですね。「小籠包」とか「クラゲ」とか「シュウマイ」とか、みんな言うんだけど、それってそれがシュウマイに似ているというよりは、そういうものとしてここにはそれがある、という特徴として認識するじゃない。そういうことってどうなんだろうというのを考えたんですよ。あれを説明する時は

構造とか、空気の流れとか言っているんだけど、そういうのとは別に、知らないかたちなんだけど、知っているものかもしれないっていうものが気になっているし、そういうものを僕はつくろうとしています。特にこういう発表の場では、説明を求められるじゃないですか。そんな時に説明しようがないけど伝わる物ってあるじゃないですか。ふにゃっとした形とかもそうなんだけど、妹島さんの建築って「あの形は何でこんな風にふにゃふにゃしたかたちなんですか？」っていうのはあんま聞かなくて、中の機能は聞くけど、それはもうそういうものとしてある、みたいな感じじゃないですか。門を作れと言われた時にそういうのがちょっと気になったんだよね。だからその南さんのやつっていうのは、機能がないっていうよりは、僕はそれを見た時に、本当にそれがその地域のものになるような状態って、例えば僕だと名前が付けられるってことだけど、南さんにとって、「それはこういう状態である！」っていうのを提示しなかったのは良くなかったなと思いました。提示ができていれば面白かったのになあ、と思って見ていました。僕が最近考えていたのはそういうことですかね。

畝森　その話に繋がるかわからないけど、言語学者のソシュールが「言葉は世界を分節する」ということを言っていて、例えば虹は僕たち日本人は7色と思うじゃないですか。でも未開民族の人は、2色と認識している。何故かというと言葉がないから。同じ虹でも僕たちは橙色や紫など言葉を持っているから7色と思うけど、2色と認識している人もいる。要するに言葉があるかどうかで世界は分節される、あるいは形作られる。別の言い方をすると、言葉が生まれることで事物は輪郭を持ち、認識が始まると言っているんですね。南（俊允）さんが話された事もそれに近いかなと思って、その「小籠包」という言葉が生まれることによって、形として認識され、共有できるものになっていく。南（苑佳）さんの提案もそうだけど、言葉を与えることができれば、みんなにとっての価値になる、そこが必要なんだろうなと思いました。

南　僕も引っかかっていて、いわゆる「なんでも良いじゃん」っていう、風景になるっていうことなんだと思う。誰もがこうだってわかるものを提示できれば良かったんだろうなと思っていて。そういう意味で5原則があって、それがこれ、これ、これって分かりやすく提示されているということよりも、「こういうものだ」っていうかたちと言葉を一緒に与えられているっていうことがすごい豊かな状態だと思うんだよね。

畝森　言葉のことは僕も気になります。今のソシュールの話もそうですが、建築をつくる時に何か言葉を与えると、そこで理解が進みます。でもそれは必ずしも正しいとは限らないと思っていて、明快にはなるけど、一方で僕達の暮らしはもっと複雑で曖昧だから、あまり言葉を与えたくないという思いもある。言葉を作ると理解はできるけど、理解しづらいところも求めたい。その矛盾をどう建築にするか、すごく意識しています。例えば、建築には幅木という部材がある。幅木は壁と床の間にあり、僕たち建築の専門家は壁、幅木、床という3つを認識している。でも一般の多くの人は幅木という言葉を持たないから、壁と床だけを認識する。その差があるわけです。建築を設計するうえで、機能的な目的で幅木をつけるけど、もし大多数の人が幅木のない世界を見ているならば、その状態にどう近づけられるか。分節しないと建築を作れない、でもその分節をなるべく無くしたいという矛盾をどう乗り越えられるか意識しています。他にも、大きいとか小さい、明るいと暗い、もっと言うと、おじいさんと小さな子供、健康な人と障がいを持っている人、といった異なる状態や人間をいかに一つの空間に同時に存在できるか、みたいなことに今興味があります。

南　それってこの前できた東京の住宅や須賀川市民交流センターtetteなどをつくりながら見えてきたものでもあるんでしょうか。

畝森　そうですね。建築はどんなに小さな住宅であっても、ある公共性を持つものだと思うので、いかに異なるものを受け止められるか、最近は特に意識してきましたね。

――聞いていて思ったことが、最近の住宅とか、いろんな機能が分かれていたのが結局全体的に繋がっていて、ワンルームのように繋がる住宅ってたくさんあるなあと思っているんですが、tetteのような市民センターも、ある機能で最初は分けようと思っていたけれど、だんだん機能で分けるっていうことがなくなって、住宅のような市民センターなのかなと思いました。（藤井）

畝森　どんなに大きな建築も、また小さな住宅も結局使うのは同じ人間で、その人間のサイズは変えられないから、やっぱりどこかで地続きだと思う。住宅の使い方やその時代の感性は、公共建築のように大きくなっても変わらない。それは、建築を物理的に捉えるという意味でも大事なことだと思います。妹島さんは自分の作ったものに驚いたとか、「こうだったのか」みたいによく書かれているけど、どこか自分の設計したものを他者のように、また歴史的な建築を見るように俯瞰的に見て、その発見を次の自分につなげている。そういう観察の仕方はすごいなと思います。建築は、そのプロセスを問わず建ち上がったものが全てであり、それ故に機能の区別なく地続きだと。須賀川も僕のそれ以前の住宅があったからこそ出来たし、そういう自分の作品をいかに次につなげられるかというのは、建築家にとって大事なことだと思います。

「地続きの建築」

――お二人の中で、自分の作品を作ってから「自分ってこういう側面あるな」と思ったりすることはありますか。（藤井）

畝森　最初にSmall Houseという小さな住宅を作ったのですが、とにかく細かく几帳面に設計しました。きちんと納めることを目指していたけど、完成したらなんだか堅いなあと。自分は意外とルーズで、だらしないのが好きな時もあるなとか、人間らしさも欲しいなとか。あの住宅は床も薄いし柱もピン角で優しさがない（笑）。やっぱり手触りや柔らかさも大事だな、というのは最近少しずつ思ってきました。例えば、伊東豊雄さんは、ガラッと作品が変わっていきましたよね。中野本町の家からシルバーハットへ約10年ごとに大きく変わり、更にそこから八代やメディアテークに発展していく。社会と自分自身を照らし合わせ、常に挑戦し変えていこうとする姿勢は本当にすごいと思います。

「100倍を想像する」

――tetteのことでお聞きしたいと思っていたのが、ものすごく膨大なヒアリングをして、でも結局建築はポンと1個できる。できてからいろんな相反する意見をまとめた結果できた機能に対するものとか、それを超える何かが出てくるのかとか、みんなが受け入れてくれそうだけどこの建築は1個なんだよなとか、すごく不思議でした。（藤井）

畝森　とにかくやれるだけのことをした、という感じですね。めちゃくちゃ破天荒になった訳でもなく、シンプルにつくりたいという気持ちも確かにあった。その両義的なものが多分色んな人に受け入れられるような気がして設計していました。

南　ちょっと今のと関係しているんですけど、畝森さんってワークショップをどういう風にやってきましたか？

畝森　普通だと思いますよ。案を提示して、意見を付箋に書いて貼ってもらうみたいな。須賀川の時はそうでしたね。短期間に何回もワークショップをしたので、案をブラッシュアップして次に提示することができなくて、単純にプロポ案をもとに皆で意見をバーっと出してもらう方法でした。ただ、その数が膨大すぎた（笑）。

南　普通のと違って、数があまりにも膨大だとどう違うのかなっていうのは気になりました。僕がやったことのあるワークショップとしては、ぎふメディアコスモスがありますが、あのときは2つワークショップをやって、1つはその図書館ができるための、いわゆる形式的な市民に公開するワークショップがありました。それとは別に、商店街とか町の人で面白い人を集めて、日比野克彦さんがリーダーになってやるワークショップがありましたが、それとも違うようなので、興味があります。

畝森　須賀川の場合は複合施設なので参加者は5グループ、図書館グループや子育てに関するグループなど、要するに役所の縦割り的にグループが決まりました。そのグループごとに役所が声をかけたので、今まで利用してきた人たちが集まるわけです。全部で延べ100人以上が参加し、1400以上の意見を聞いたので、これは大した数だと自分でも思います。でも冷静に考えると、須賀川市の人口は約7万7千人だから、そのうちのわずか100人、全体の1%にも満たない人たちの、しかも既存利用者の限られた意見だと気づくわけです。ワークショップをしながらすごく違和感を感じましたね。残りの7万6千人以上の人はどんな意見かわからないので。僕はこれまで住宅しか設計したことがなくて、住宅だと施主の意見＝100%だから、それを元に提案できる。それに比べて公共施設のワークショップはわずか1%から100%を考えないといけない。そのギャップを感じて、ある瞬間からはどうやってこの100倍を想像するかを意識し始めたのです。そうやって沢山意見を聞いていくと、ひとつひとつはバラバラな意見に聞こえるけど、それらに共通する潜在的な思いのようなものを見つけようという考えになっていきました。大量の意見を聞くと頭がぼーっとしてきて、だんだん研ぎ澄まされていくみたいな（笑）。建築の設計も一緒のように思います。模型をたくさん作っていくとだんだん重要なことがわかってくる、そんなスタディと似た感じでした。

南　それがプランにもどんどん。

畝森　プランは最初は分けていました。1枚の床に1つの機能を割り当て、それぞれを分けようとしていたのが、そうではなくてもっと横断的に、連続的に使いたいことがワークショップのなかで徐々に分かってきたのです。そこで全体が図書館のように、本を色んな所に置くことがプログラム的に反映されていきました。また空間的にも、分けながらもスロープや階段で緩く繋いでいくことになったのは、ワークショップを経てからですね。

南　多分滑らかに繋げたいとか市民の人は言わないから、色々言われた中で「分かれながら繋がっていたい」みたいなことを咀嚼して、建築に持っていくということですよね。

畝森　大前提として、分けることは間違っていませんでした。分ける、だけど繋がっていたいという言葉にできない思いがあるのではないか。その朧げなイメージをどう建築にするか、みたいなことを考えていました。

南　そのワークショップは、その後の使い方みたいなところまで提案したりとか。

畝森　図書館を建物全体に広げるという提案は市にとっては不安でしかなく、本の管

理はどうするんだとか、セキュリティや運営時間など大きな問題になりました。そこで、役所側の組織体制を変え、縦割り的だった組織をまとめてこの交流センター専属の整備室を作ってもらったり、市民もいかに運営に参加できるかといった運営方法の議論にも発展していきました。だから最初の話ではないですが、諸条件から疑うことは大事ですね。与えられた条件のまま作っても建築はできるし、おそらくそれなりになったと思うけど、「それは本当に正しいのか？」と疑問をもち、自分なりに考えて具体的に示す。そこにはやはり観察力や想像力が必要だし、また建築家に求められることではないでしょうか。思いがあるのではないか。その朧げなイメージをどう建築にするか、みたいなことを考えていました。

南　そのワークショップは、その後の使い方みたいなところまで提案したりとか。

畝森　図書館を建物全体に広げるという提案は市にとっては不安でしかなく、本の管理はどうするんだとか、セキュリティや運営時間など大きな問題になりました。そこで、役所側の組織体制を変え、縦割り的だった組織をまとめてこの交流センター専属の整備室を作ってもらったり、市民もいかに運営に参加できるかといった運営方法の議論にも発展していきました。だから最初の話ではないですが、諸条件から疑うことは大事ですね。与えられた条件のまま作っても建築はできるし、おそらくそれなりになったと思うけど、「それは本当に正しいのか？」と疑問をもち、自分なりに考えて具体的に示す。そこにはやはり観察力や想像力が必要だし、また建築家に求められることではないでしょうか。

畝森　メディアコスモスも結構ワークショップはやられましたか。

南　ワークショップは何回かやりましたね。でも、あれをやった時に僕がワークショップってこういうものだなって思ったのは、僕が気になっている「名前を付ける」っていうのに近いですね。ワークショップで日比野克彦さんと最初にやったのは、ここで映画をみんなで撮るっていうワークショップをやったんですよ。施設をもとにそれぞれに映画のストーリーを決めて、各班映画を作るっていうのをやりました。他には使い方をどうするかという基本的なこともやりましたが、最初に映画を撮るワークショップをしていました。この部屋ちょっとこうして欲しいとか要望もあるんだけど、日比野さんは結構はっきりしていて、そこは建築家であるプロにやってもらうと言うんですね。このワークショップでは日比野さんがやったのは今ある理念や部屋の名前をつくるというものです。市の方で掲げてるこの施設の理念があったのですが、それはとても硬い言葉で出来ていました。それをもうちょっと柔らかい言葉で理念を作ろうっていうもの。もうひとつは部屋に名前をつけることなんですね。できた部屋の名前はドキドキテラスとか考えるスタジオとかオノマトペみたいなものに最終的にはなりました。それまでは全部スタジオA・スタジオBとか、会議室とか展示室大・小とかでしたが、既成のものじゃなくて全部に新しく名前をつける。部屋の名前をつける時に、そこは何の場所なのかっていうのを考えないといけなくて、例えば、考えるスタジオっていうのはギャラリーとしても使えるし、レクチャーとしても使えるなど、いろんなことができる。ではそのいろんなことができるというのを何と言うかっていう時に、「考える」っていう言葉にたどり着いた。これは僕もワークショップに参加していてとても発見的な経験でした。言葉をみんなで与えたりするんだけど、そういう言葉を与えるっていう行為が、さっき話したのとちょっと関係してるんだけど、他者が、しかもある程度状態も違う人たちがいた時に、ある程度いろんな人がそう呼べる名前を決めるっていうのはなるほどなぁと思いました。そのワークショップをやること自体が、その直接施設っていうよりは、僕らの手を離れた後に、どういう風にまちの人に入っていくかっていうところを意識してワークショップはやりました。だからその畝森さんのルートとは違うんだけど、ワークショップをやってプランが変わったということはなくて、むしろ2年間ひたすら「その場所は何か」についてやってきたっていうのがありますかね。そういうワークショップでした。

畝森　会議室と呼ぶのか、他の名前にするのかで使い方は大きく変わるでしょうね。同じ建物でも「学校」と「○○を学ぶ場」では全然違うでしょうし、言葉によって建築が変わることは十分あり得ると思います。しかもそれを建築家が一方的に決めるのではなく、市民と一緒に決めるというのは、大きいでしょうね。

「個を超えた先の公共性」

南　僕は卒業設計では、2つについて気になって見ていました。1つは、他の人の言葉やかたちを借りたものではなく、その人自身から生まれたもの、その人でしか生まれ得なかったものであること。もう1つは、それらがかたちとして現れていて、新しい時代の息吹・片鱗を感じさせるものであること。そういう切実さですね。公共性とか、みんなが使えるっていう事は、みんなが使えるためにつくっていてもできない気がしている。それはある個人のあまりにも強すぎる思いがその個人を超えた時に、ある公共性を持つみたいなもののような気がしています。それは伊東さんから僕が得たことの1つですね。そういう個人から出てきたものが世界を変えるっていう事を信じている。さっき畝森さんが「ある一人のためにつくる」って言っていたけど、僕もそれはそうだと思っていて、住宅のためにつくっているんだけど、それがその住宅を越えてつながる可能性があるような物であるっていうのは、そういうところだなと思っている。例えば、妹島さんの梅林の家はその豊かさを感じてとても好きな住宅です。何かのために極限的につくったものが、そのためじゃなくて世界につながるみたいな事、個人的にすごく入り込んでいる物には、たとえ住宅をつくっていたとしても結構公共性を感じたりするんだよね。その人がどう思っているかは別として、そういうのを考えて見ていました。

「それぞれの卒業設計と、つながっているもの」

南　ちょっと卒業設計の話に戻して、少し自分の卒業設計について話しますね。まず自分も卒業設計を考えたきっかけから。僕は石川県の田舎の農家で育ったので、家に40畳の畳の部屋とかあって、部屋も30〜40部屋くらいある。冠婚葬祭はすべて各々の家で行われる。その村の人は、生まれて死ぬまでそこで生きるわけですよ。そういう所から東京に来て六畳一間に暮らすようになった時に、しかもそれが建築計画で教わったキッチンの寸法とかでできていて、明らかに実家に帰ると実家の方が気持ちいいのに、なんか大学で教わっていることが絶対違うことのような気がしてきて、それをずっと大学の4年間ずっと思っていたから、卒業設計では「大きいものは豊かだ」ということをやりました。「オーバーサイズビルディング―大きいということのその質―」というタイトルでした。空間がどんどんどんどん大きくなった時に、計画学だけで語れない価値観が出てくる。そういうことをやりたくて、ひたすら大きくしていったんだよね。最終的には集合住宅をつくったんだけど、すごく個人的な実感と思いからからつくっていった。修士設計とかはそれをどんどん超えちゃって、結局山をつくった。大学ではそれは建築じゃないと批判されたから、それを卒業したら自分が行く設計事務所で建築としてやります、と啖呵を切ってたのを覚えています（笑）。

最終的にはそれから7、8年かかって担当したぎふメディアコスモスがそうです。小嶋さんをご案内した時にその話になり、めずらしく褒めてもらったことがとても嬉しかった。メディアコスモスは100m角の大きな空間がある。小学生の時に行った図書館で走って怒られて、それがすごい記憶に残ってて、自分が設計をするんだったらそういう図書館はつくりたくないと思った。その時にいろんなことがつながって、例えばまちの外で走っててもだれも怒らない。だけど例えば会議室みたいなところで携帯鳴ったりすると怒られたり、気にするじゃないですか。そういうように何かを制限していけばいくほど音とか光とか何かが気になったりとか、そういうのも同じ原理で、どんどんどんどん大きくしてければある時気にならなくなるんじゃないかと思ったんですね。そこで超大きくした平面をつくって、そうすると子供がどこで泣いてても、勉強してる人がいても誰も怒らないという状況が生まれた。この建物の説明として、伊東事務所としては構造とか設備とか説明してるけど、僕個人としてはそういうものからあれが生まれています。そういう風に個人で考えていることが、公共性を作れる可能性があるなと思っています。今日もし言えることがあるとすれば、こういう違う個性があった時に、違う個性が今後作る全てのものにつながる可能性があるということ。卒業設計は、今だけのものではなく、この先のその人の人生において、大きなエンジンになると思う。畝森さんはどんな卒業設計をやりましたか。

畝森　僕は四谷にある台地の境界部分に集合住宅をつくりました。台地の上にはマンションが建ち並び、下には木密が広がる敷地です。木密には細い路地があり、その路地も設計しつつ、台地の上下からアプローチできる集合住宅を提案しました。社会的な格差がその地形に現れているのですが、路地が集合住宅まで続くものを作りました。

南　そこでやったことが、今振り返ると繋がってるといったものはありますか。

――地続きっていうことは共通してるというか。（藤井）

畝森　そうですね。なるべく排他的に考えない、等しく大事というのは共通しているかも。あと断面ですね。M1の時に西沢大良さんに卒業設計を見せたら、すぐさま断面が良くない、断面を描けと強烈に言われました。その影響もあり、断面は今もずっと意識して設計していますね。僕は岡山県の出身ですが、岡山には丸みのある綺麗なシルエットの山が並んでいます。その山には一本一本色々な木が生えていて、針葉樹から広葉樹まで美しい山は色々なものでできている。全体的な美しさと、ひとつひとつの個性のようなものは全然分かれていなくて、植物があり、昆虫がいて、動物が住んでいて、そのひとつひとつがあるからこそ、大きく綺麗な山が存在する。部分と全体は相反せず、有機的に連続していることを僕は子どもの頃に学ぶことができたと思います。

「これから考えること」

――これから建築をずっとやっていくにあたって、例えば畝森さん南さんの世代の人たちがこれは頭に残しておきながらやるべきだっていうこととか、僕らの世代が今のこの時代だからこそ、頭の中に置いておきながら建築について考えるべきだっていうことはありますか。（山田）

畝森　これからより問われてくると思います。もう新しいものを作らなくていい時代ですよね。でも、建築が形をもって建つのは凄いことで、全く関係ない人もその建築を見て体験することができる。それは建築が持つ大きな価値で、与える影響は凄まじく大きい。より形にしづらくなる時代だからこそ、その形を意識するのは大事だと思います。インターネット、ＳＮＳ、他にもコミュニティだったり、具体的に見えないものがたくさんある。その中で形をもつ建築をどうするのか、すごく難しい課題だけど、僕は考えていきたいですね。みんなも意識するといいと思います。

南　僕はあまり年代とかの違いは感じないですね。一緒に生きてるから年齢は関係なくみんな同じ、みたいな感覚です。だから伊東事務所は、伊東さんみたいな人からオープンデスクまでみんな同じで、オープンデスクの人が模型作ってたら「そいつに模型つくらせるんじゃなくて一緒に案を考えさせた方がいいじゃないか」みたいなこと言うんですね。つまり、違う立場の人がいることが豊かだから、一緒に考えたらいいじゃないか、という感じの人の下で教わったから、みんなの世代にこうして欲しいとか、僕らの世代はこうしないといけないみたいなことは、あんまりないのが正直な所っていうのがひとつ。

あとは、結構意識しているのは面白いものをつくるっていう気持ちを持ち続けること。普通のことなんだけど、このことが重要だなと思っている。卒業証書の裏にみんなで寄せ書きしてるんだけど、小嶋一浩さんに書いてって言ったら、「面白いものを！小嶋」って書いてくれて、その時はいまいちよくわからなかったけど、最近卒業証書を見返すことがあって、改めて今見ると「面白いものを」っていうのは、みんなが面白いっていうよりは、自分が面白いと思えるものなんだろうなとふと思った。そう思い続けられるか、ずっと面白いと思い続けるっていうのは、多分建築のことよりも自分が生活してたり、生きてて、いろんなものに興味を持ったりし続けられるかっていう、人間力みたいなことだと思うんだよね。それって多分建築をずっとやってることで育まれることでもあるんだけど、家族がいて、友達がいて、みたいなことで育まれることもあるじゃない。そういうことだと僕は受けとったんですね。もし僕たちの時代にしかできないものをつくれるとしたら、多分今の時代に生きてるって事が濃ければ濃いほど反映される気がするんだよね。つまり前の時代みたいな生き方じゃなくて、今の時代、だからiPhoneを持って、運動しながら音楽聴きながらみたいな。そういう現代に生きてるって事が濃ければ濃いほど、そういうものになるんじゃないかっていう気がしてます。だからしっかり生きたいっていうのと、面白いものを面白いって言い続けたいという気持ちはあります。みんなにどうして欲しいかわからないけど、その世代だからとか世代を分けて考えるのではなくて、みんな同じ時代に生きてることは変わりないから、それをよりリアルに、身体感覚として持っていることが重要な気がします。だから伊東さん見ててすごい若いなと思う（笑）。iPadも使うし、すごいメールとかもやりとりするし、それはたぶん年齢ではなくて、時代を読む力のようなものがあるだと思うんですね。僕もそういう人間でいたい。

――本日はありがとうございました。